

**アーツカウンシルしずおか
文化芸術による地域振興プログラム
社会福祉法人ひかりの園
事業評価報告書**

2022 年 3 月

目次

評価結果の要約.....	2
1.団体概要	2
2.事業概要	2
3.評価結果概要.....	3
1.対象事業.....	4
1-1.事業の背景・経緯	4
1-2.事業の特徴	5
1-3.事業のこれまでの軌跡	5
1-4.評価対象事業.....	6
2.事業評価.....	12
2-1.評価目的	12
2-2.評価設問	13
2-3.評価のスケジュール.....	13
2-4.評価結果	14
2-4-1.事業の成功の姿	14
2-4-2.セオリー・オブ・チェンジ	15
2-4-3.調査の実施方法	17
2-4-4.調査結果及び分析	18
2-5.まとめ・今後に向けて	29
2-5-1.まとめ.....	29
2-5-2.今後に向けて.....	29

評価結果の要約

1. 団体概要

社会福祉法人ひかりの園は、浜松市内の数人のカトリック信者の強い熱意により 1972 年に設立許可を受け、翌 1973 年に浜松市内において初めての特別養護老人ホームである静光園を開設し、さらにその翌年の 1974 年に市の委託事業として知的障がい児通園施設浜松市根洗学園が開設された。

「喜ぶ人と共に喜び 泣く人と共に泣きなさい」という法人訓のもと、

- 1 ひとりひとりの尊厳を大切にするために
- 2 誰もが住みやすい社会をつくるために
- 3 安心して暮らす場をつくるために
- 4 専門的な支援を届けるために

の 4 つを実現するために福祉事業を行っている。¹



浜松市根洗学園 外観

浜松市根洗学園は、「落ち着きがない」「遊べない」などの気になる行動があったり、言葉や社会性の発達がゆっくりな乳幼児を対象とした「療育」を行う施設である。開設以来、子どもの中に内在する「発達していく力」「学ぶ力」に期待をかけ、親と職員と子どもの三者が一体となって子どもの育ちに取り組んでいる。

2. 事業概要

評価対象は、浜松市根洗学園（以下、学園）で行われている福祉×アート活動のうち、学園に通う子ども及び保護者を対象とした以下の活動とした。なお、今般の新型コロナウイルス感染拡大の影響等により、学園での活動も制限せざるを得ず、低年齢児等の感染拡大後に入園した子ども及び保護者については、下記のうち「①おべんとう画用紙」しか参加の機会がなかった、というような状況もあった。そのため、本評価結果についても、「①おべんとう画用紙」を中心とした内容になっていることをあらかじめ申し添えておく。

内容
①おべんとう画用紙（2009 年～現在） 子どもが描いたおべんとうの絵をもとに保護者がおべんとうを作る、親子対象のプログラム
②アーティスト・イン・レジデンス（scenery）（2018 年～現在） 学園や家庭での日常を演劇の専門家によって映像化する取り組み

¹ 社会福祉法人ひかりの園ホームページより (<https://www.hikarinosono.or.jp/about/>)

③ 母親向けワークショップ「ゆるゆるしてみる」 （2018 年～2020 年） 音楽・ダンス・演劇・作業療法といったさまざまな分野の専門家による、母親向けのワークショップ
④ 親子音楽ワークショップ （2017 年～2020 年） 親子で即興の音楽セッションを楽しむワークショップ

3. 評価結果概要

本事業評価は、「福祉×アートの実践が生み出す価値の整理を通して、障害のあるなしに関わらず、子どもや親も過ごしやすい地域づくりにつながる要因を明らかにする」ことを目的として行った。学園としては、療育の場にアートの視点を取り入れた活動が、学園だけでなく、同法人内の他事業所や他法人が運営する療育機関や福祉事業所にも広がっていくことも目指しており、学園での活動を振り返ることを通して活動が生み出す価値が明らかになり、学園での活動の改善や各所での実践に活用されることを目指している。

評価にあたっては、学園で行われている親子向けの活動を通して実現したい「成功の姿」と、その成功の姿までの変化の道筋（セオリー・オブ・チェンジ）の整理を行い、それらに基づいて評価設問と評価基準を設定した。評価設問としては、おもに活動に参加した保護者の気持ちや子どもへの関わり方などがどう変化したか、といった保護者に関する内容を設定している。

その後、活動に参加した保護者向けにアンケート調査及びインタビューを行い、各評価設問について以下のような結果・示唆を得ることができた。

評価目的	福祉×アートの実践が生み出す価値の整理を通して、障害のあるなしに関わらず、子どもや親も過ごしやすい地域づくりにつながる要因を明らかにする。
評価設問	①活動に参加したことで、保護者は子どもについての新たな気づきがどのくらい得られたか。 ②活動に参加したことで、保護者の気持ちはどう変化したか。 ③活動に参加したことで、保護者の子どもとの関わり方や関係性はどう変化したか。
分析結果 ※上記評価設問 ①～③と対応	① 日常とは違ったことに取り組むことで、日常では見られない子どもの一面が引き出されやすくなり、新たな気づきにつながっている例が見られた。一方で、保護者自身の中にあつた、「こうあるべき」といった思い込みに対する気づきが得られた例も見られた。 ② アンケートに回答した保護者の約 30%が、子育てで悩んだときの悩みへの向き合い方にいい変化があったと実感し、約 25%の保護者が、子育てに関する孤独感や不安感の減少につながっていた。さらに、ポジティブな気持ちで活動に参加した保護者は、より変化を実感している傾向がみられた。 ③ アンケートに回答した保護者の約 56%が、子どもとの関わり方や子どもとの関係性にいい変化があったと実感していた。さらに、ポジティブな気持ちで活動に参加した人は、より変化を実感している傾向がみられた。

1.対象事業

1-1.事業の背景・経緯

浜松市根洗学園（以下、学園）では、2008 年から美術家や音楽家など外部のゲストを迎えて、絵を描いたり、ものをつくり、音や演奏を聴いたりするワークショップやアーティスト・イン・レジデンス、展覧会などさまざまなアート活動を行っている。こうした活動が始まったきっかけについては、①早期発見・早期療育のシステム化（乳幼児期からの支援体制が母子保健・子育て支援も含めてできてきた）、②隔離的な療育（ずっとこの施設にいれば安心）から通過型（施設を活用しながら、地域で当たり前のように生活することを目指す）への視点の転換、といった療育を取り巻く環境や期待される役割に関する2つの大きな変化が挙げられている²。施設の中での完結ではなく、社会や地域という当たり前の世界とのつながりを見据えたときに、学園での日々の支援の問い直しが必要ではないか、といった想いから、外部のアーティストを学園に招き、違った視点を取り入れることによる職員の気づきや関わりの広がりが生まれることを目指して、これらの取り組みが始まった。



活動の様子

（「身体に意識を向けるとどうなるの？」

（2019/9/30）

療育の現場に外部のアーティストを迎え入れた当初は戸惑いを感じることもあったそうだが、療育・福祉の専門性とは違った専門性を持つアーティストの考え方や捉え方は、療育をよりよくするための数多くの気づきや発見を学園にもたらしてくれた。

さらに、学園で日々起こる子どもたちと職員のやりとりの中には、障害のあるなしに関わらず活用できる「子育てのヒント」や「他者と深く関わるためのヒント」が多くあり、それを外部の人に理解してもらうことは「施設を開いていくこと」にもつながっていく、という考えのもと、2013 年からは学園の子ども・保護者や職員だけでなく、展覧会や公開講座といった学園の取り組みを一般の人にも知ってもらうための取り組みが始まった。また 2016 年からは一般の人と一緒に参加できるワークショップも行われており、外部のさまざまな人たちと一緒に活動するこれらの場は、さまざまな人たちと学園との「気づきのもらい合い」の場になっている。

なお、今年度は、

- 保育者の見えざる技発掘！（子どものまなざしや行動を読み解く映像制作プロジェクト）
- ねあらい版手引書制作（アートを福祉現場に取り入れるには～これまでの活動を伝える～）

に取り組んでいる。保護者や職員だけでなく、おそらく療育に関わりがない人たちの中にもある、福祉に対するわからなさ・近寄りにくさや、福祉や子育てにおける「こうあるべき」という思い込み・決めつけが少しでもほぐれるよう、アートの持つ自由さ、面白さ、とらわれのなさを活かした実践を続けている。

² 浜松市根洗学園「おと からだ プロジェクト ～アーティストと作業療法士による、子どもの運動機能へのアプローチ手法開発～」 p2

1-2.事業の特徴

これまで学園では、アーティストや職員が子どもたちの中に入って一緒に遊ぶものから、一般の人と職員がともに活動するものまで、さまざまなプログラムが行われているが、いずれの実践においても特に大切にしていることとしては、

- 参加者が対等な関係性の中で、
- 日常とは少し違った場や体験をそれぞれに味わい、
- 参加者それぞれの表現や気づきを大切にする

の3つに集約することができる。

それぞれのプログラムでは、アーティスト達が「コトが起こるきっかけ」を投げかけてくれる。そのきっかけに対する参加者の反応はさまざまであるが、決してその反応を無理にまとめようとはせず、それぞれの気づきを大切にしながらその場に居られることが保障される。こうしたプログラムの特徴は、まさに学園が目指している地域や社会の姿であり、これらのプログラムの継続・拡がりによって、皆がともによりよく暮らす地域社会の実現に一步でも近づいていきたい、という想いが込められていると言えよう。

1-3.事業のこれまでの軌跡

学園のこれまでのアート活動の軌跡を、学園に通う子ども・保護者や学園の職員が対象の活動（内向き）と地域の人や学園外の福祉関係者も対象とした活動（外向き）に分けると、図 1-1 のように整理できる。時系列にすることで、療育の場にアートの専門性が加わることで化学反応が起こり、徐々に内向きから外向きへ活動が広がっていった過程が確認できる。

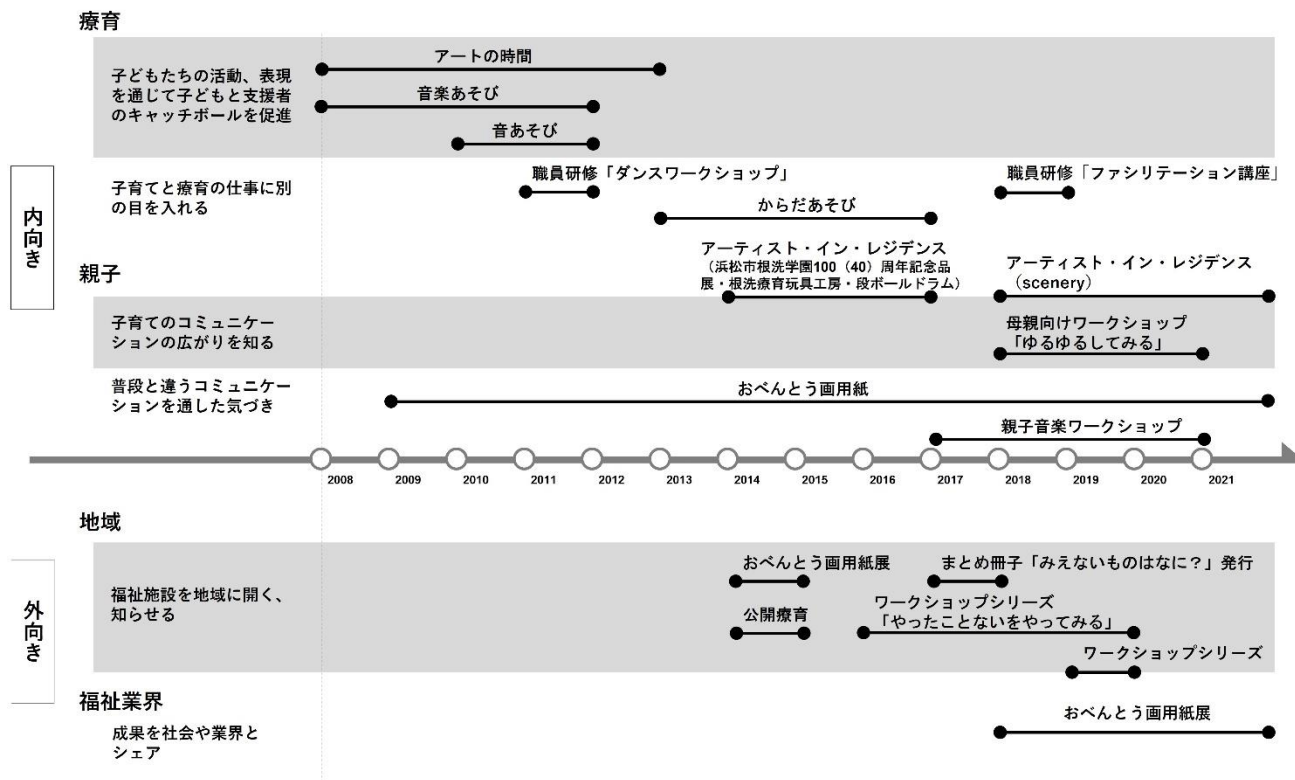


図 1-1 根洗学園でのアート活動の整理

1-4. 評価対象事業

今回の事業評価は、

- 新型コロナウイルス感染拡大の影響により、外向きの活動がほぼ行えていない。
- 活動を通じた職員の変化については、本評価とは別の機会でも振り返りを行っている。

等の理由から、活動のすべてを対象とせず、「親子向けの活動」に対象を絞っている。さらに、現在在園の子ども及び保護者が通園する以前に行われた活動については、評価が困難なため対象から外し、以下の活動を評価対象とした。



図 1-2 本評価の対象事業

続いて、各活動の概要について説明する。³

・おべんとう画用紙

アーティストの深澤孝史氏が考案した、親子対象のプログラムである。子どもが描いたおべんとうの絵をもとに保護者がおべんとうを作る、といったやりとりを通して、子どもの気持ちに想いを馳せ、気持ちを読み解くといったコミュニケーションが生まれる取り組みで、学園では2009年から現在まで続いている。

なお、2014年と2018年に展覧会（おべんとう画用紙展）が開催されたが、2018年には学園の子どもだけでなく近隣の保育園にも呼びかけ、それぞれに実施したおべんとう画用紙を展示した。現在も市役所の公共スペース等を使用した展覧会は継続している。



出典: <https://obento-gayoshi.com/>

図 1-3 おべんとう画用紙のつかいかた



作品①



作品②

³ 各活動についての説明は、以下資料の内容をもとにまとめている。併せて図や写真についても同資料より引用している。

・浜松市根洗学園/深澤孝史「おべんとう画用紙」
・浜松市根洗学園『「みえないものはなに？」“気づき”に気づく練習帳 浜松市根洗学園のワークショッププログラム』
・浜松市根洗学園「2019年度事業まとめ わが家流子育てのすすめ ～アート×療育×コミュニケーション」



おべんとう画用紙展の様子



おべんとう画用紙の活動の様子

おべんとう画用紙に参加者した保護者及びおべんとう画用紙展の来場者の感想をいくつか紹介する。

・保護者の感想⁴

- ・うまく絵では表せなくても、頭の中でお弁当ができていて、「これは何？」と聞くと「おにぎりだよ」と教えてくれました。いつもとはちがう話ができたり、子どもの考えが知れてよかったです。
- ・まだ言葉がでていないので、全てを想像で作らないといけないので、大変でした。しかし、子どもがどんな気持ちでお弁当を描いたのかな？とその光景を想像する時間は楽しくもありました。
- ・子どもが描いてくれた絵を親がお弁当で再現するということで、親子でひとつのものを完成させた感じがして嬉しく思いました。普段子どもが描く絵について、これまであまり想像力をはたらかせることはなかったので、「これは何かな？」と考え、それを料理で作って子どもの反応を見るのが楽しかったです。

・おべんとう画用紙展の来場者の感想⁵

- ・子供の意図を様々なコミュニケーションを通して作られたお弁当は、どれも愛を感じ、見ていてほっこりしました。ただ、絵を形にするのではなく、子供の味覚や興味、相談するなど、五感を使って親子のコミュニケーションが垣間見える素敵な展示でした。（30代・会社員）
- ・保護者の想像力と表現力の苦悩を感じるとともに、その裏で行われた子どもとの会話をほほえましく思いました。（20代・男性）
- ・絵で描いたものを実際に作るのは、面白いと思いました。子供ができればやってみたいです。子供も大人も楽しそう。発想がすごいと思いました。（10代女性・学生）

子どもが描いた絵を保護者が読み解こうとし、お弁当を作ることで「こう読み解いたよ」と伝える、といったおべんとう画用紙を介したコミュニケーションがそれぞれの親子の間で行われていることがうかがえる。さらにそうしたコミュニケーションが親子の

⁴ 2021 年におべんとう画用紙に参加した保護者向けに、学園が行ったアンケートから引用

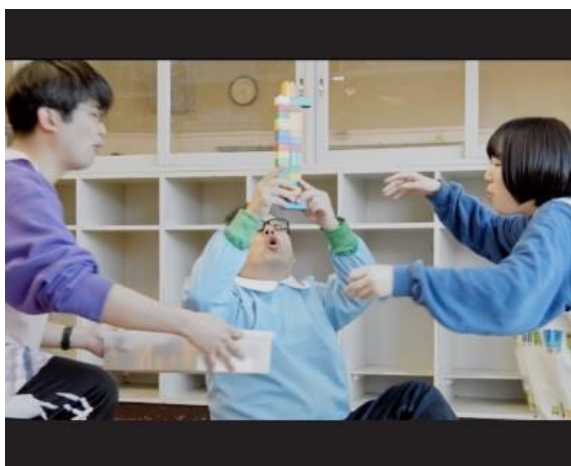
⁵ 浜松市根洗学園「おべんとう画用紙」p16

間だけでなく、おべんとう画用紙展でそれぞれの絵やおべんとうを見た来場者にも広がっており、コミュニケーションの形は必ずしも言葉である必要はなく、さまざまな表現がコミュニケーションを媒介しうることや、そうした言葉以外の表現に気づいて受け取る側の感受性や守備範囲が変わることでコミュニケーションは豊かになっていく、ということに改めて気づかせてくれる取り組みといえる。

・アーティスト・イン・レジデンス（scenery）

演劇家である柏木陽氏を学園に招き入れ、映像作品制作を行った取り組みである。療育の現場で日々繰り広げられている子どもと職員との何気ないやり取りを、別の視点を持つ演劇の専門家が場面を切り取って映像化するというプロセスを通して、現場では当たり前すぎて見落としていることに気づききっかけが生まれることをねらいとしている。

演劇を取り入れた活動自体は2017年から行われており、2017年は学園の職員が園の日常をテーマにした演劇づくりに取り組んだ。その演劇はその年の卒園式の中で職員によって演じられ、式の参加者に療育の現場での日常風景を知ってもらうことができた。この取り組みを通して、演劇を取り入れることで学園の日常をより多くの人に知ってもらえる可能性が見えた一方、一般の人にも見てもらうためには子どもたちのプライバシーへの配慮が必要であることや、職員の負担についても考慮した結果、職員が演じる形からプロの役者の方達が参加する形に移り変わっていったという経緯がある。



撮影の様子①



撮影の様子②

映像作品としては、

- 役者が療育を演じる（「scenery ～場面ごとに見る保育者の工夫」）
- 一人の園児を追いかけて日常と変化を撮る（「観察と記録」）

の2つがあるが、このうちの scenery の制作過程においては、柏木氏や演じる役者の方達は実際に療育の現場に入っており、職員と同じように子どもの着替えやトイレトレーニング等を行っている。学園の様子をただ見るだけでなく、実際に体験したからこそ、療育や各職員の工夫により気づくことができ、その気づきをもって学園の日常を演じている。

さらに撮影時には、学園の職員が役者へ動きの指導を行っており、それがよりリアリティのある療育現場の「あるある」の再現につながっていると、職員側にとっても日々の自身の行動の言語化や見直しの機会になっている。ある職員の方は以下のような感想を話しており、映像制作のプロセスを通した変化の様子がうかがえる。

「私たちが日頃、当たり前だと思っていたことが当たり前ではなかったと気付かされた瞬間でした。柏木さんや俳優のみなさんからの反応は日ごろの子どもたちとの関わりを肯定してくれているような気がして、嬉しくもあり、自信にもなりました。⁶」

こうしたプロセスを経て制作された scenery の各作品は、現在根洗学園の YouTube チャンネル⁷で公開されている。学園の「あるある」な日常がリアルに描かれながらも、思わずクスッと笑ってしまうような内容になっており、療育に関わりがない人にとっても、映像を観ることで療育に対する理解の深まりやイメージの変化につながるものと思われる。

その後 scenery については、2020 年に「scenery ～そんなこともあるかもしれない家族の過ごし方～」として、家庭での子育ての様子を描いた作品が追加されている。こちらも、学園の保護者にとっては「あるある」と思えるような内容となっているが、映像を観た学園の保護者から以下のような感想があり、映像制作のプロセスを通して学園の職員に気づきや変化が生まれたように、保護者の方にとっても、日常の振り返りや捉えなおしが起こっていることがうかがえる。

「お母さん達の会話や、連携プレーの場面も、普段本当にその場にいたら、真面目に一緒に悩んだり必死になっていることなのに、『そうそう！こんな感じ！』『あるある！まさにこれ！』と、『プッ』と吹き出してしまいました。」

「どのご家族にも困ったことや楽しいこと、それぞれの対処法で乗り切っているんだなと観てて思いました。」⁸

・母親向けワークショップ「ゆるゆるしてみる」

音楽・ダンス・演劇・作業療法といったさまざまな分野の専門家による、母親向けのワークショップである。子育てに追われる日常から少し離れ、心や身体をリラックスさせながらそれぞれの感覚を見つめてもらう場として、2018 年から行われている。

学園の松本園長は、「育児に正解はない。そのため『どうすることがわが子にとって良いのか？』『これが合っているのか？』という不安や心配につながります。子育てをする母親自身が、自分の感覚を信じ、『これでいいかも』と思えるきっかけとなる場として、このワークショップを実施しています⁹」と話しているように、子育てにおける唯一の「正解」ではなく、各家庭なりの子育てのヒントが見つかるかもしれない場として現在も続いている取り組みである。

⁶ 浜松市根洗学園「2019 年度事業まとめ わが家流子育てのすすめ ～アート×療育×コミュニケーション」p13

⁷ 浜松市根洗学園 YouTube チャンネル <https://www.youtube.com/channel/UC-Mx-44hRzVsRty-QLTKbWQ>
※なお、本リンクは 2022 年 3 月 10 日時点のものである。

⁸ 渡辺涼子「2020 年 柏木陽アーティスト・イン・レジデンス報告書(概要版)自己対象化の道具としてのアート 療育と子育てをめぐる映像作品についての保育者・親の思い」

⁹ 浜松市根洗学園「2019 年度事業まとめ わが家流子育てのすすめ ～アート×療育×コミュニケーション」p22



活動① 講師：川口淳一氏（作業療法士）



活動② 講師：柏木陽氏（演劇家）



活動③ 講師：砂連尾理氏（ダンサー）



活動④ 講師：片岡祐介氏（音楽家）

・親子音楽ワークショップ

音楽家の片岡祐介氏による、親子で即興の音楽セッションを楽しむワークショップである。形にとらわれずに音と自由に遊べる環境の中で、音を介したコミュニケーションや、その中で起こるさまざまな気づきを親子で楽しめる内容になっている。他の家族と一緒にのくみんで、ひと家族ごとで行うくしぽりの2つのパターンで行われた。

さらにこうしたワークショップと併せて、学園の教室を会場にした「ワイワイ楽しむコンサート」も開催された。このコンサートでは静かに聴かないといけないといったルールはないため、コンサート中は声を出したり、追いかけっこを始めたりする子どももいたが、それがきっかけになって即興のやりとりが起こるなど、楽しく音と遊ぶコンサートになった。

松本園長は、「走り回ることわが子の音の楽しみ方であると思えることは、音楽を楽しみたいと思っているにも関わらず、音楽の常識にとらわれ、楽しみ方のバリエーションを狭めてしまうことにつながっていないかを問い直し、一緒に考える場にもなっていくと感じています。子どもが自ら大事にする自分らしさ、子どもらしさを、具体的に子育てにつなぐヒントをえたり、確認する場として、今後も試行錯誤し考えていきたいです。¹⁰⁾」と話しており、「こうあるべき」といったことにとらわれずに子どもとともに音楽を楽しむことを通して、日々の子育てにおいても無意識のうちにとらわれていた「こうあるべき」に気づききっかけとなるような活動といえる。

¹⁰⁾ 浜松市根洗学園「2019 年度事業まとめ わが家流子育てのすすめ ～アート×療育×コミュニケーション」p30



音楽ワークショップの様子



ワイワイ楽しむコンサートの様子

2.事業評価

2-1.評価目的

評価目的及び評価結果の活用方法の検討とは、つまり、「何のために評価を行うのか？」「誰のための評価か？」を考えることといえる。親子向けのアート活動に取り組む中で課題に感じていることや、その課題の解決にむけて評価がどういった貢献を果たせるのか、といった点についてメンバー間で意見を出し合い、以下のように設定した。

評価目的

福祉×アートの実践が生み出す価値の整理を通して、障害のあるなしに関わらず、子どもや親も過ごしやすい地域づくりにつながる要因を明らかにする

評価結果の活用方法

- ・ 当事業の今後の活動を検討する際の資料として活用する
- ・ 法人内の事業所及び静岡県内の福祉・教育等の各現場で、アート活動を行う際の参考情報として活用してもらう

評価目的としては、もちろん学園の子どもや保護者のため、ということは大前提としてあるものの、学園としては、障害のある子どもだけを対象にしたり、障害のある子どもへの支援を何か特別なものにしたわけではなく、アートのゆるやかさやしなやかさを活かしながら、いろいろな子どもがいることやそういった子どもたちもいるのが社会である、という理解が広がってほしいと考えている。よって、本評価を通して、福祉×アートの活動が子どもや保護者にとってどのような価値をもたらしているかに加えて、学園での活動がよりよい社会の実現にどのように貢献しているのか、また今後さらに波及させていくために重要な点は何か、といった問いに対する示唆を得ることも目的に含めた。

2-2.評価設問

評価設問とは、評価目的の達成のために明らかにする必要がある「問い」のことを指し、評価基準は評価設問に答えるために何を測る必要があるか、にあたるものである。それぞれ検討の結果、表 2-1 の通り設定した。

表 2-1 評価設問及び評価基準

評価設問 (評価目的のために何を明らかにするか)	評価基準 (何を測れば評価設問が明らかになるか)
① 活動に参加したことで、保護者は子どもについての新たな気づきがどのくらい得られたか。	新たな気づき
② 活動に参加したことで、保護者の気持ちはどう変化したか。	保護者の活動に参加する前と参加した後の気持ち
③ 活動に参加したことで、保護者の子どもとの関わり方や関係性はどう変化したか。	保護者の変化の実感

なお、検討にあたっては、「学園の活動に参加することを通して子どもが変化していくことはあっても、活動によって直接的に子どもを変えようとは考えていない。さらに子どもというよりも、子どもの周囲に変化が起こることを期待している」という考えに基づき、本評価では特に保護者に関する変化に注目することとした。そのため、各評価設問についても子どもではなく保護者に関連した内容となっている。

2-3.評価のスケジュール

本評価のスケジュール及び各回の打ち合わせに参加した検討メンバーは表 2-2 の通りである。

表 2-2 本評価のスケジュール

日程	内容
2021/7/20	第 1 回打ち合わせ（キックオフ） ・評価目的の検討
2021/8/26	第 2 回打ち合わせ ・事業の成功の姿の検討
2021/9/28	第 3 回打ち合わせ ・セオリー・オブ・チェンジの検討
2021/10/27	第 4 回打ち合わせ ・評価設問及び調査方法の検討
2021/11/15	現地訪問 ・保護者ヒアリング（4 名）

2021/11/24	第5回打ち合わせ ・アンケート調査票の検討
2021/12/20	保護者向けアンケート調査の実施
2022/1/12	第6回打ち合わせ ・アンケート集計結果の共有 ・インタビューの実施方法の検討
2022/2/7～2/9	保護者向けインタビューの実施
2022/3/4	第7回打ち合わせ ・評価報告書のまとめ

※検討メンバー

- ・松本 知子 氏（浜松市根洗学園 園長）
- ・渡辺 涼子 氏（浜松市根洗学園 臨床発達心理士，浜松学院大学・早稲田大学 非常勤講師）
- ・溝口 智美 氏（浜松市根洗学園 元職員・作業療法士）
- ・鈴木 一郎太 氏（アーツカウンシルしずおか プログラム・ディレクター）

※評価担当者

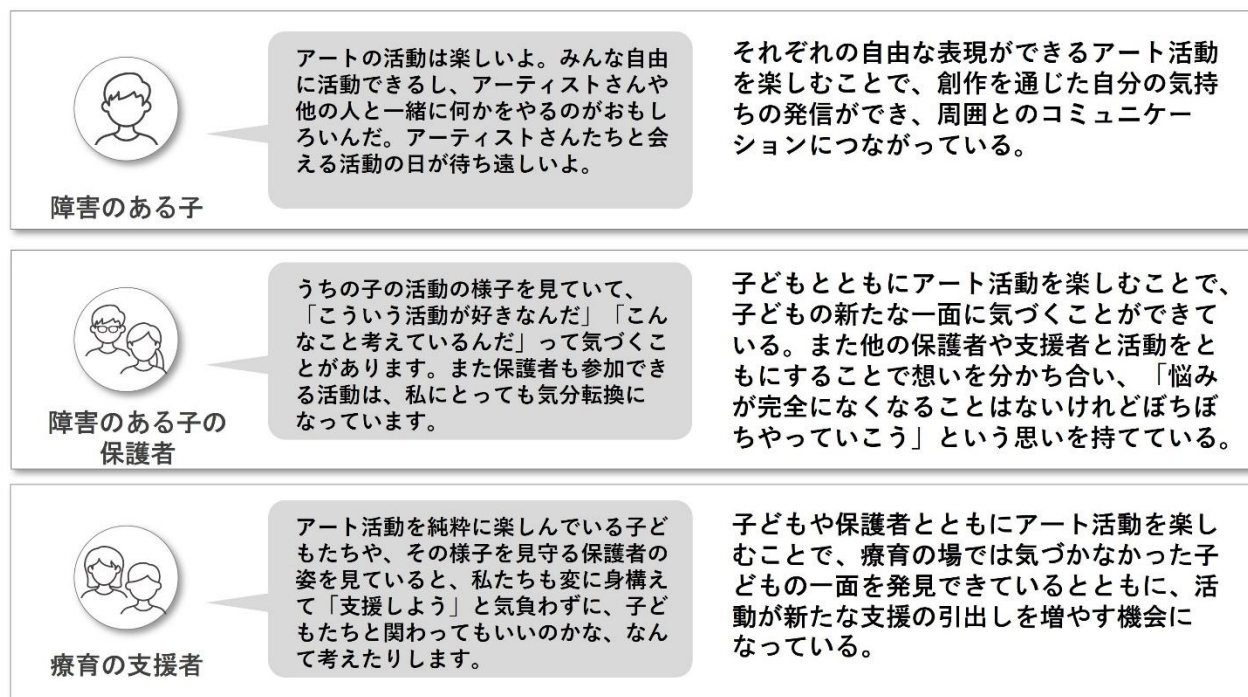
押切 重喜（フクシノスイッチ代表 社会福祉士、日本評価学会認定評価士）

2-4.評価結果

第1回打ち合わせで設定した評価目的に基づき、「事業の成功の姿」「セオリー・オブ・チェンジ」を作成し、それらを踏まえて前述の評価設問・評価基準の設定及び調査の実施という流れで進めていった。

2-4-1.事業の成功の姿

本評価の対象である親子向けの活動の「成功の姿」について、ここが明確になっていなかったり、メンバー間で相違があったりすると、この後評価を通して何を明らかにすればいいかが定まらなくなるため、メンバー間で改めて検討を行い、図 2-1 のようにまとめた。



障害のある子やその家族が、地域の中でその子らしく、その家庭らしく生活ができる

図 2-1 事業の成功の姿

子どもがアート活動を楽しむ様子から、保護者や学園の職員が今まで気づかなかった子どもの一面に気づき、子どもに対するまなざしや関わり方が変わっていく。そしてそうした変化・理解が徐々に学園の外にも広がっていくことで、障害のある子が何か特別な存在ではなくなり、さらにその先に、地域にはいろいろな子どもがいるという周囲の理解のもと、その子らしく、その家庭らしく生活が送れるという姿が見えてくるのではないかと、このように整理をした。

2-4-2.セオリー・オブ・チェンジ

事業の成功の姿の検討を受け、続いてセオリー・オブ・チェンジの検討を行った。成功の姿までの道筋としては、楽しんで活動に参加する子どもの様子を見た保護者・職員の関わり方が変わるという「子どもの周りが変化する道」と、保護者自身も活動を楽しむことで気持ちに変化する「保護者の内側で起こる変化の道」の大きな2つの道があるのではないかと考えた。

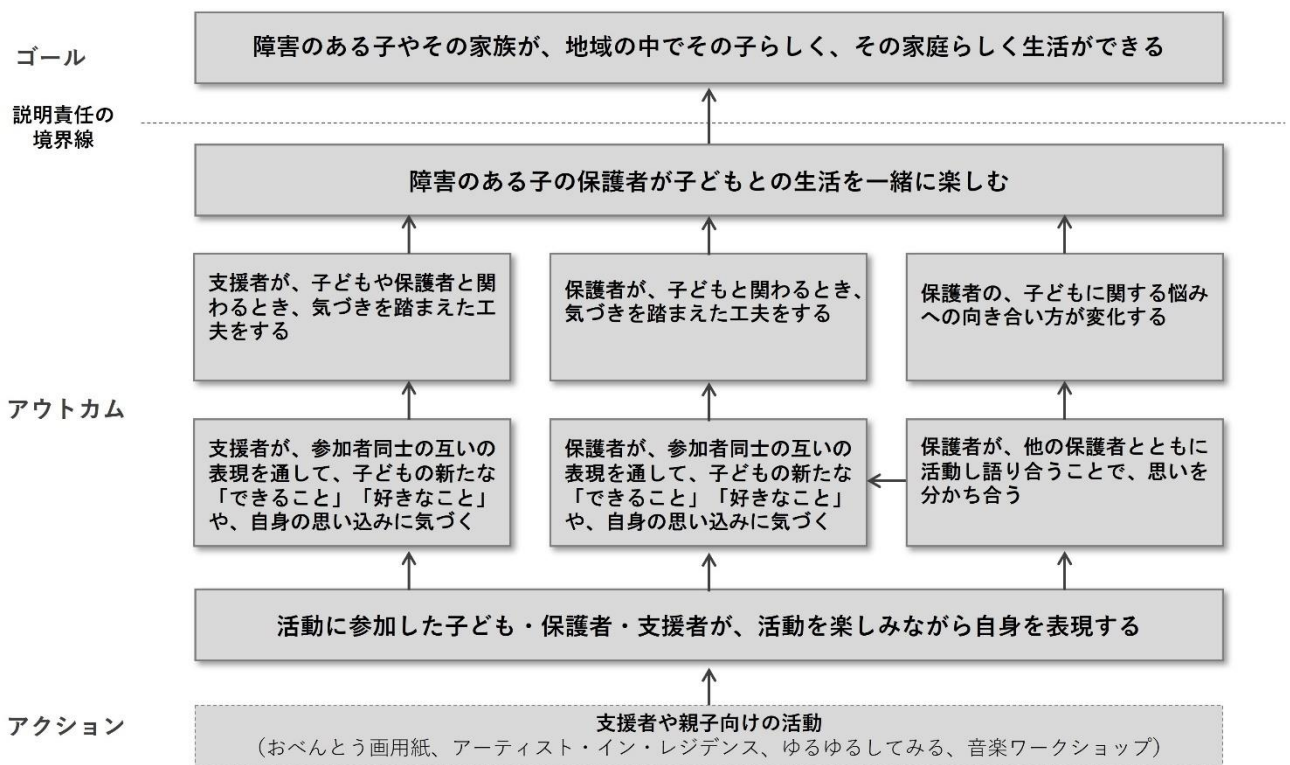


図 2-2 セオリー・オブ・チェンジ

なお、このセオリー・オブ・チェンジでは、子どもが変化していく過程について触れられていない。これまで学園の活動に参加した子どもの中には、活動に参加したことがきっかけとなって興味関心の幅が広がった、というような変化が見られた子どももいるが、2-2.評価設問でも述べたように、「学園の活動に参加することを通して子どもが変化していくことはあっても、活動によって直接的に子どもを変えようとは考えていない」という考えのもと、上記のような形でまとめている。

また、こうしてセオリー・オブ・チェンジの検討を通して、メンバー間でさまざまな気づきがあった一方、そもそもこうして変化の道筋を整えることに対し、

- 活動に参加したらいつも気づきが得られないといけない、というわけではないのではないか。（気づきを得ることを目的としていない参加のしかたがあってもよい）
- それぞれのアウトカムについて、変化したと思ったらまた戻ったり、というように、いつも順調に変化の道筋を進んでいけるばかりではない。このセオリー・オブ・チェンジから外れたり、行きつ戻りつという動きをしたりすることも決して悪いことではないのではないか。

といった意見もあった。

こうしたやり取りが行われたことを受け、2021年11月に現地訪問を行い、保護者の方4名にヒアリングに協力いただいた。そこでのヒアリング内容等も踏まえて、いったん上記のようなセオリー・オブ・チェンジとしたが、この形が最終確定版というわけではなく、またこのセオリー・オブ・チェンジに固執しすぎることで上記のような視点が失われてしまうようなことは避けたいと考えている。本評価を進めている現時点においても、十分に言語化しきれていない点があるようにも感じているため、本評価以降も活動についての振り返りを行う機会を持ち、見直しを重ねていきたいと考えている。

なお、セオリー・オブ・チェンジを踏まえて、表 2-1 評価設問及び評価基準を設定したが、各評価設問はセオリー・オブ・チェンジの下記の箇所に該当したものになっている。

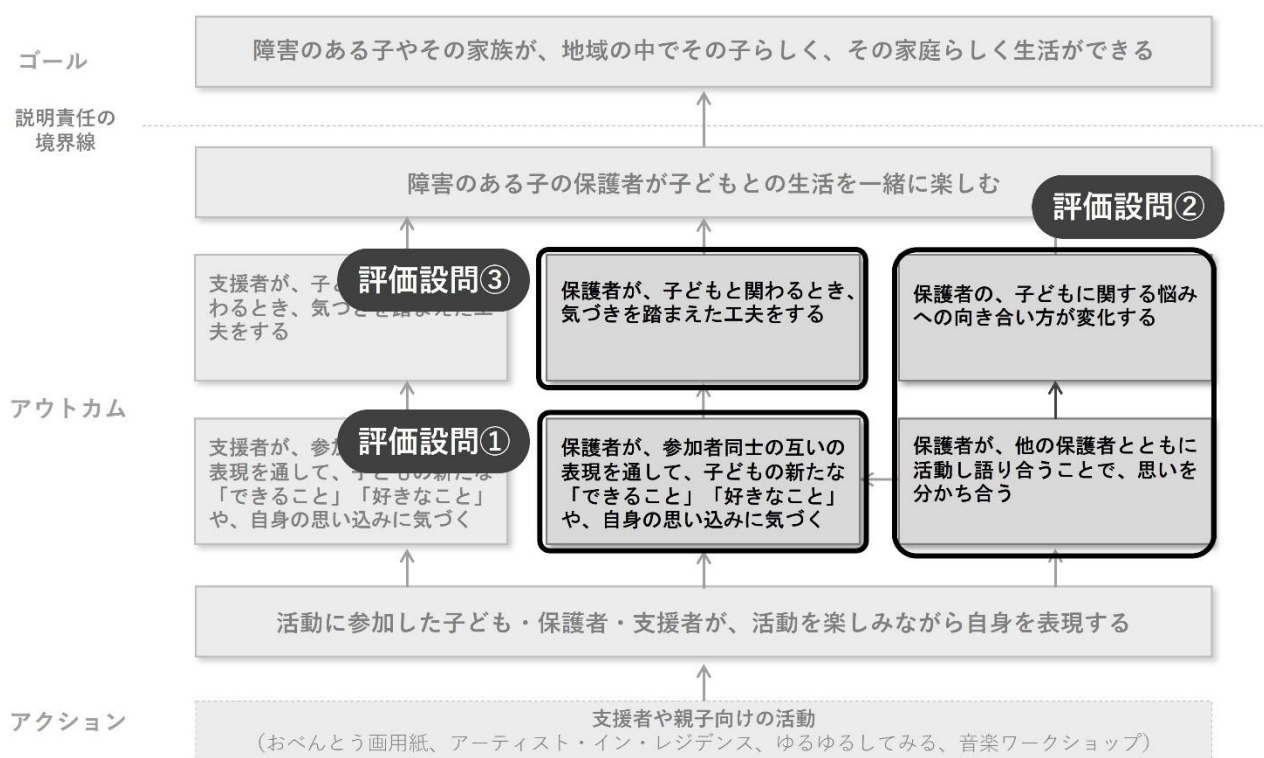


図 2-3 セオリー・オブ・チェンジと評価設問の整理

2-4-3.調査の実施方法

事業の成功の姿及びセオリー・オブ・チェンジをもとに設定した評価設問・評価基準に基づき、保護者向けにアンケート調査とインタビューを行った。各調査の方法については表 2-3 の通りである。なお、下記調査とは別に、学園では 2021 年におべんとう画用紙の活動に参加した子どもの保護者を対象としたアンケート調査を行っており、そのアンケート結果も参考にした。

表 2-3 調査の実施方法

①学園のアート活動に関するアンケート

目的	アート活動に参加した保護者の、活動に参加する前と後での気持ちや子どもとの関わり方や関係性の変化の有無について把握する。
調査対象	2021 年に学園に在籍している子ども（計 65 人）の保護者
実施時期・方法	2021 年 12 月 20 日～27 日の期間で、アンケート票を配布・回収した。

	回答数 50 件、回収率 76.9%
調査項目	・おべんとう画用紙の取り組みの際の、保護者の気持ちの変化 ・おべんとう画用紙以外の学園の保護者向けの活動への参加の有無 ・おべんとう画用紙やその他の学園でのアート活動に参加する前と後での、保護者の気持ちの変化や子どもへの関わり方や子どもとの関係性の変化

②学園のアート活動に関するインタビュー

目的	・アート活動に参加した保護者の、活動に参加する前と後での気持ちや子どもとの関わり方や関係性の変化について、より詳細を把握する。 ・学園で行われているアート活動が、保護者にとってどんな意味を持つ活動かを把握する。
調査対象	「①学園のアート活動に関するアンケート」に回答いただいた保護者のうち、インタビュー調査への協力を了承いただいた保護者 10 名
実施時期・方法	2 ～ 3 名のグループで Zoom にて実施。園長に同席いただき、評価者がインタビューを行った。 (2/7(PM) : 2 名、2/8(AM) : 3 名、2/8(PM) : 2 名、2/9(AM) : 3 名)
調査項目	・おべんとう画用紙の取り組みの際、保護者が感じた気持ちの詳細 ・おべんとう画用紙やその他の学園でのアート活動に参加しているときの、特に印象的なできごと ・おべんとう画用紙やその他の学園でのアート活動に参加する前と後での、子どもや保護者の変化の有無と詳細 ・保護者にとっての、学園でのアート活動の意味合い

2-4-4.調査結果及び分析

各調査の結果について、評価設問に沿って分析を行っていく。

評価設問① 活動に参加したことで、保護者は子どもについての新たな気づきがどのくらい得られたか？

→日常とは違ったことに取り組むことで、日常では見られない子どもの一面が引き出されやすくなり、新たな気づきにつながっている例が見られた。一方で、保護者自身の中にあった、「こうあるべき」といった思い込みに対する気づきが得られた例も見られた。

ここでは、②学園のアート活動に関するインタビューの内容の一部を紹介する。なお、本インタビューは、おべんとう画用紙以外の親子向けアート活動も対象にして行ったが、協力してくれた保護者の大半がおべんとう画用紙以外の活動に参加する機会がなかった方達であり、以下の内容はいずれもおべんとう画用紙に取り組んだ際の気づきを回答いただいている。

・いろんな色を使って絵を描いていた。決まったお皿でなくても食べてくれた。

- ・いろんな色を使って絵を描いていた。いつもは枠など気にしないで絵を描いているが、おべんとうの枠からはみ出さないように描いていた。
- ・普段食べないものも食べてくれた。
- ・普段はお絵かきはしないけれど、自分でイメージしたものを描いていた。
- ・おべんとうを食べているとき、子どもの表情、目の動きが違った。
- ・好きな食べ物が決まっていて普段は興味を示さないような食べ物も、「これなに？」と聞いてくれた。
- ・おべんとうを見せたら「うわ～おいしそう」と言ってくれた（普段はあまり言わない）。

インタビューに協力いただいた保護者の方の回答を見る限り、おべんとう画用紙という日常とは違った活動だからこそ、日常では見られない子どもの一面が引き出されやすくなり、それが保護者の気づきにつながっている、という解釈ができるだろう。

一方、おべんとう画用紙の取り組みを通して、子どもに対する気づきだけでなく、保護者自身についての気づきもあった、という声もあった。

- ・いつも食べないものも、形を変えたら食べてくれたので、普段やらないことも工夫をしてみたらやってもらえるかもしれない、と思えるようになった。こうするしかない、と思うと余裕がなくなってしまうが、気持ちの余裕のようなものができた。
- ・参加する前、食事は親が食べてほしいと思っているものを提供する、と考えていたが、おべんとう画用紙では喜ぶものを作った。普段は健康になってほしいという想いがあるが、おべんとう画用紙では、いまを楽しくしてもらうために、と考えるきっかけになった。
- ・自分は絵を忠実に再現しようと思って作ったが、そうではない人もいた。いろんなパターン、考え方があることに気づかされた。

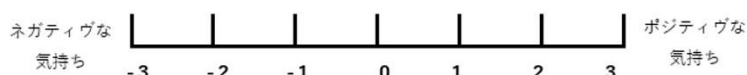
おべんとう画用紙といういつもとは違うお弁当作りの体験を通して、「工夫をしてみたら変わるかもしれない」「食事は親が食べてほしいと思っているものを提供する」「いろんなパターン、考え方があることに気付かされた」といった、自らの中に作り上げていた「こうあるべき」という思い込みに気づき、問い直しが起こっている様子がうかがえる。また、いつもと違ったお弁当作りの体験を他の保護者とともに行うことで、子育てに対する自身以外の考え方ややり方を知ることができ、気づきの多い合いにつながっている様子も見られた。

評価設問② 活動に参加したことで、保護者の気持ちはどう変化したか？

→アンケートに回答した保護者の約 30%が、子育てで悩んだときの悩みへの向き合い方にいい変化があったと実感し、約 25%の保護者が、子育てに関する孤独感や不安感の減少につながっていた。
さらに、ポジティブな気持ちで活動に参加した保護者は、より変化を実感している傾向がみられた。

活動に参加する前と後での気持ちの変化について、①学園のアート活動に関するアンケートの集計結果に沿って説明する。なお、はじめに、おべんとう画用紙の活動に取り組んでいるとき（活動中）の保護者の気持ちについては図 2-4 のとおりである。活動をしながら保護者の方それぞれで気持ちに変化している様子が見られるが、いずれの段階においてもポジティブな気持ちで参加している保護者の方が多いことがわかった。

おべんとう画用紙の取り組みに参加したときの、保護者の方が感じた気持ちについてお聞きします。次の①～④のときに保護者の方が感じた気持ちについて、-3から3の間であてはまるところに○をつけてください。

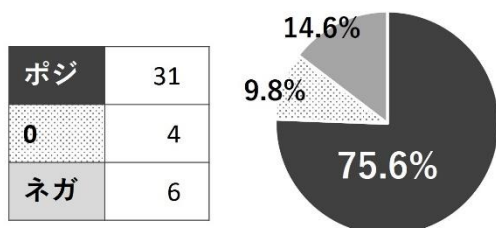


項目	平均値
①お子さんが描いたおべんとうの絵をはじめて見たとき	1.4
②絵を見ながらおべんとうを作っているとき	1.3
③完成したおべんとうをお子さんに見せて、おべんとうを食べているとき	1.8
④おべんとう画用紙展などで、他のお子さんのおべんとうの絵や保護者の方のおべんとうの写真を見たとき	0.9

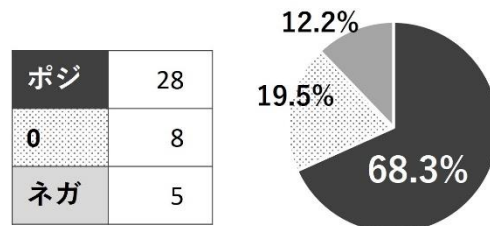
※ポジ：+1～+3と回答した人数、0：0と回答した人数、ネガ：-1～-3と回答した人数

n = 41

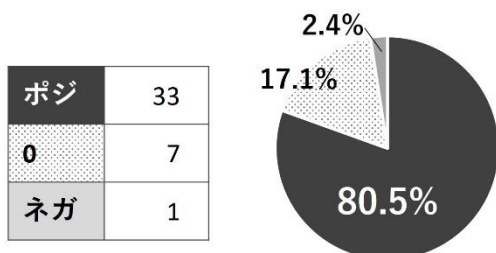
①お子さんが描いたおべんとうの絵をはじめて見たとき（平均値：1.4）



②絵を見ながらおべんとうを作っているとき（平均値：1.3）



③完成したおべんとうをお子さんに見せて、おべんとうを食べているとき（平均値：1.8）



④おべんとう画用紙展などで、他のお子さんのおべんとうの絵や保護者の方のおべんとうの写真を見たとき（平均値：0.9）

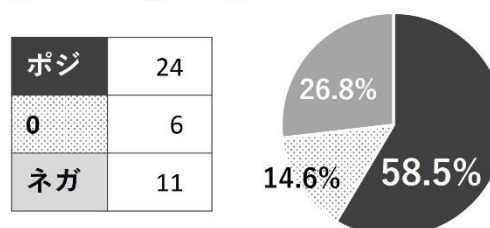


図 2-4 おべんとう画用紙の取り組みに参加したときの、保護者の気持ち

なお、ここで挙げられているポジティブ、ネガティブな気持ちの詳細については、インタビュー調査で聞き取りを行っている。それぞれの方の気持ちの変化は表 2-4 のとおりである。¹¹

¹¹ インタビューでは、おべんとう画用紙の各取り組みの際に感じた気持ちについて、感情を表す語群から選んでもらう形式で確認を行った。語群に当てはまるものがない場合は、その他として回答してもらっている。

表 2-4 おべんとう画用紙の取り組みに参加したときの、保護者の気持ちの詳細

	①おべんとうの絵をはじめて見たとき	②おべんとうを作っているとき	③おべんとうを見せて食べているとき	④他の子の絵やおべんとうを見たとき
Aさん	戸惑い	悩み	必死	うらやましい
Bさん	感心	難しい	楽しい、感心	興味深い
Cさん	不安	楽しい	達成感	興味深い、共感、想像
Dさん	うれしい	楽しい	うれしい	恥ずかしい
Eさん	楽しい	楽しい	安心	感心
Fさん	興味深い	面倒、大変、あせり	うれしい	興味深い、感心
Gさん	うれしい、おかしい	楽しい、面倒くさい 気持ちいい	うれしい、興味深い	愕然、すてき
Hさん	おかしい、興味深い	うれしい	楽しい、いとおしい	感心、おどろき
Iさん	興味深い、感心	楽しい、後ろめたい	うれしい、安心、 いとおしい	興味深い、気持ちいい、心強い

※ポジティブな気持ち：白、ネガティブな気持ち：グレー で色分けをしている

さらに、インタビューで回答いただいた内容を参考に、①～④の各段階で、ポジティブ・ネガティブそれぞれの気持ちにつながると思われる要因を抽出した。

表 2-5 おべんとう画用紙の各段階で、気持ちに影響すると思われる要因

	ポジティブな気持ちの増幅につなが と考えられる要因	ネガティブな気持ちの増幅につなが と考えられる要因
①おべんとうの絵をはじめて見たとき	・子どもなりの工夫や考えが伝わって きた	・おべんとうを作る見通しが立たない ・忙しい中取り組まないといけない
②おべんとうを作っているとき	・再現するアイデアがひらめいた ・家族で話し合いが行われた	・料理が苦手 ・絵をうまく再現できない
③おべんとうを見せて食べているとき	・おべんとうを見て子どもが喜んだ ・おべんとうを完食した	・おべんとうを喜んでもらえなかった ・おべんとうを食べてもらえなかった
④他の子の絵やおべんとうを見たとき	・他の保護者の工夫や試行錯誤を 見ることができた	・他の子の絵や保護者のおべんとうの 方が出来がよかったと感じた

続いて、活動に参加した後の気持ちについて説明する。本来であれば活動に参加する前と参加した後のそれぞれのデータを収集して比較すべきところだが、活動に参加する前のデータを収集していなかったため、活動に参加する前と後での変化の実感の有無という形で回答してもらった。

また、今般の新型コロナウイルス感染拡大の影響から、そもそも活動自体を制限せざるを得なかったという事情もあって、回答者の8割近くは、おべんとう画用紙以外の活動には参加したことがない、という状況だった。そうした活動の機会が限られた中ではあったが、約30%の保護者が、子育てで悩んだときの悩みへの向き合い方にいい変化があったと思うと回答している（そう思う：7.0%、ややそう思う：23.3%）。また約25%の保護者が、子育てに関する孤独感や不安感が減少したと思うと回答している（そう思う：7.0%、ややそう思う：18.6%）。

おべんとう画用紙やその他の活動に参加する前と後での、保護者の方ご自身の変化についてお聞きます。活動に参加する前と後で、次のような変化があったと思いますか。

	そう思う	やや そう思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	そう 思わない
子育てで悩んだときの悩みへの向き合い方に、 いい変化があったと思う	3	10	21	7	2
子育てに関する孤独感や不安感が減少したと思う	3	8	22	8	2

n = 43

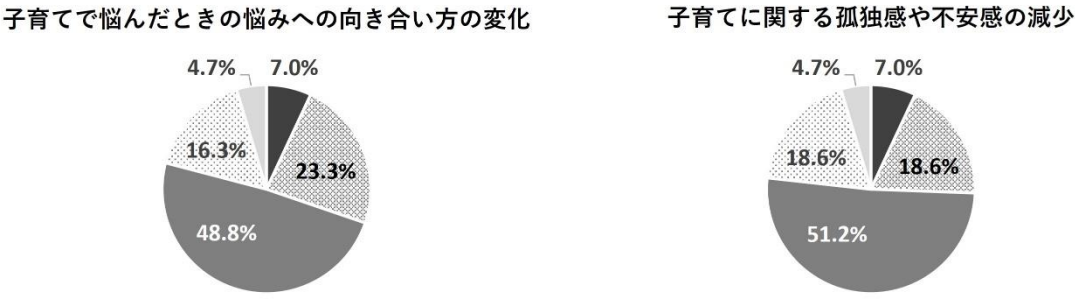


図 2-5 学園の親子向け活動に参加した前後での気持ちの変化

なお、図 2-4 でまとめたポジティブな気持ちで参加した保護者とそれ以外の保護者とで比較をすると、ポジティブな気持ちで参加した保護者の方が、子育ての悩みに対する向き合い方、子育てに対する不安や孤独感のいずれにおいても、いい変化を実感している割合が増加している。ここでいうポジティブな気持ちとは、具体的には表 2-4 にあるような、「うれしい」「楽しい」「興味深い」といった気持ちであると考えられるが、こうした気持ちを感じながら活動に参加することで、表現の幅の広がりや気づきの獲得が促進されている可能性が考えられる。

子育てで悩んだときの悩みへの向き合い方に、いい変化があったと思う

①お子さんが描いたおべんとうの絵をはじめて見たとき

	回答数	子育てで悩んだときの悩みへの向き合い方に、いい変化があった人の割合
ポジ	31	 31人中11人(35.5%)が、「そう思う」「ややそう思う」と回答
0	4	 4人中0名 (0%)
ネガ	6	 6人中0名 (0%)

②絵を見ながらおべんとうを作っているとき

	回答数	子育てで悩んだときの悩みへの向き合い方に、いい変化があった人の割合
ポジ	28	 28人中10人(35.7%)が、「そう思う」「ややそう思う」と回答
0	8	 8人中1名 (12.5%)
ネガ	5	 5人中0名 (0%)

③完成したおべんとうをお子さんに見せて、おべんとうを食べているとき

	回答数	子育てで悩んだときの悩みへの向き合い方に、いい変化があった人の割合
ポジ	33	 33人中11人(33.3%)が、「そう思う」「ややそう思う」と回答
0	7	 7人中0名 (0%)
ネガ	1	 1人中0名 (0%)

④おべんとう画用紙展などで、他のお子さんのおべんとうの絵や保護者の方のおべんとうの写真を見たとき

	回答数	子育てで悩んだときの悩みへの向き合い方に、いい変化があった人の割合
ポジ	24	 24人中9人(37.5%)が、「そう思う」「ややそう思う」と回答
0	6	 6人中0名 (0%)
ネガ	11	 11人中2名 (18.2%)

子育てに関する孤独感や不安感が減少したと思う

①お子さんが描いたおべんとうの絵をはじめて見たとき

	回答数	子育てに関する孤独感や不安感が減少した人の割合	
ポジ	31	▶ 	31人中9人(29.0%)が、「そう思う」「ややそう思う」と回答
0	4	▶ 	4人中0名 (0%)
ネガ	6	▶ 	6人中0名 (0%)

②絵を見ながらおべんとうを作っているとき

	回答数	子育てに関する孤独感や不安感が減少した人の割合	
ポジ	28	▶ 	28人中8人(28.6%)が、「そう思う」「ややそう思う」と回答
0	8	▶ 	8人中1名 (12.5%)
ネガ	5	▶ 	5人中0名 (0%)

③完成したおべんとうをお子さんに見せて、おべんとうを食べているとき

	回答数	子育てに関する孤独感や不安感が減少した人の割合	
ポジ	33	▶ 	33人中9人(27.3%)が、「そう思う」「ややそう思う」と回答
0	7	▶ 	7人中0名 (0%)
ネガ	1	▶ 	1人中0名 (0%)

④おべんとう画用紙展などで、他のお子さんのおべんとうの絵や保護者の方のおべんとうの写真を見たとき

	回答数	子育てに関する孤独感や不安感が減少した人の割合	
ポジ	24	▶ 	24人中9人(37.5%)が、「そう思う」「ややそう思う」と回答
0	6	▶ 	6人中0名 (0%)
ネガ	11	▶ 	11人中0名 (0%)

図 2-6：活動に参加した保護者の気持ちの変化（ポジティブ・ネガティブ比較）

評価設問③ 活動に参加したことで、保護者の子どもとの関わり方や関係性はどう変化したか？

→アンケートに回答した保護者の約 56%が、子どもの関わり方や子どもとの関係性にいい変化があったと実感していた。さらに、ポジティブな気持ちで活動に参加した人は、より変化を実感している傾向がみられた。

本設問についても、評価設問②と同様、前後のデータの比較ではなく、活動に参加する前と後での変化の実感の有無という形で確認を行った。その結果、保護者の子どもとの関わり方や関係性の変化については、約 56%の保護者がいい変化があったと思うと回答している（そう思う：18.6%、ややそう思う：37.2%）。

おべんとう画用紙やその他の活動に参加する前と後での、保護者の方ご自身の変化についてお聞きます。活動に参加する前と後で、次のような変化があったと思いますか。

	そう思う	やや そう思う	どちらとも 言えない	あまりそう 思わない	そう 思わない
お子さんとの関わり方やお子さんとの関係性に、 いい変化があったと思う	8	16	11	6	2

n = 43

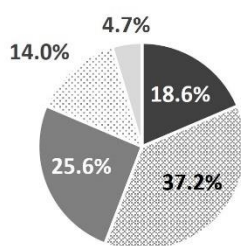


図 2-7：学園の親子向け活動に参加した前後での、子に対する関わり方の変化

また、図 2-8 のとおり、こちらもポジティブな気持ちで活動した保護者の方が、よりいい変化を実感している傾向がみられており、評価設問②と同様に、活動中の「うれしい」「楽しい」「興味深い」といった気持ちが変化の促進につながっている可能性があると言えるだろう。さらに、保護者へのインタビューの際に、おべんとう画用紙の活動を「子どもとの共同作業」と答えた方や、おべんとう画用紙の活動を通して達成感を感じた、という方がいたが、「子どもと一緒に何かをやり遂げた」という経験が子どもへの関わり方や関係性にいい変化をもたらしている、という可能性も考えられる。

お子さんとの関わり方やお子さんとの関係性に、いい変化があったと思う

①お子さんが描いたおべんとうの絵をはじめて見たとき

	回答数	お子さんとの関わり方やお子さんとの関係性に、いい変化があった人の割合	
ポジ	31	▶ 	31人中21人(67.7%)が、「そう思う」「ややそう思う」と回答
0	4	▶ 	4人中0名 (0%)
ネガ	6	▶ 	6人中1名 (16.7%)

②絵を見ながらおべんとうを作っているとき

	回答数	お子さんとの関わり方やお子さんとの関係性に、いい変化があった人の割合	
ポジ	28	▶ 	28人中19人(67.9%)が、「そう思う」「ややそう思う」と回答
0	8	▶ 	8人中1名 (12.5%)
ネガ	5	▶ 	5人中2名 (40.0%)

③完成したおべんとうをお子さんに見せて、おべんとうを食べているとき

	回答数	お子さんとの関わり方やお子さんとの関係性に、いい変化があった人の割合	
ポジ	33	▶ 	33人中20人(60.6%)が、「そう思う」「ややそう思う」と回答
0	7	▶ 	7人中2名 (28.6%)
ネガ	1	▶ 	1人中0名 (0%)

④おべんとう画用紙展などで、他のお子さんのおべんとうの絵や保護者の方のおべんとうの写真を見たとき

	回答数	お子さんとの関わり方やお子さんとの関係性に、いい変化があった人の割合	
ポジ	24	▶ 	24人中18人(75.0%)が、「そう思う」「ややそう思う」と回答
0	6	▶ 	6人中0名 (0%)
ネガ	11	▶ 	11人中4名 (36.4%)

図 2-8 活動に参加した保護者の、子に対する関わり方の変化（ポジティブ・ネガティブ比較）

2-5.まとめ・今後に向けて

最後に、改めて調査結果のまとめと、今後に向けた整理を行っていく。

2-5-1.まとめ

本評価では、根洗学園で行われてきた「福祉×アート活動」のうち、学園に通う子どもとその保護者を対象とした活動に注目し、活動に参加した保護者にどのような変化が起きているかを明らかにするため、アンケート調査及びインタビューを行った。具体的には、保護者が学園の活動に参加したことによる、①子どもに対する気づきの有無、②保護者の気持ちの変化、③子どもとの関わり方や関係性の変化、の3つについて調査を行ったが、①～③のいずれにおいても学園の活動が貢献していることが確認できた。

2-5-2.今後に向けて

続いて冒頭の評価目的に立ち返り、調査の結果及び分析を踏まえて今後に向けた整理を行う。

1)「福祉×アート活動」だからこそ、「福祉の当たり前」に対する気づきや問い直し

結局のところ、「福祉×アート活動」の場とはどんな場なのだろうか。それを考えるにあたり、1-2.事業の特徴で挙げた、学園が活動において大切にしている3点を改めて確認する。

- 参加者が対等な関係性の中で、
- 日常とは少し違った場や体験をそれぞれに味わい、
- 参加を通したそれぞれの表現や気づきを大切にする

では、この3つを満たす場をなぜわざわざ用意しているのだろうか。日々の福祉の実践の範囲で、これらを満たす活動を行えばいいのではないかと、いった考え方もあるかもしれないが、ここでは、療育・福祉における「支援する側-される側の関係」と、「正解を求めなくなる想い」の2つに注目をしてみたい。

はじめに、「支援する側-される側の関係」について、療育・福祉の現場においては、利用者と職員の対等な関係性を目指していても、支援が行われる中で「支援する側-される側」といった非対称的な関係が生まれてしまうことがある。しかし、学園で行われるアート活動の中では、利用者、保護者、職員といったことは関係なく、同じ参加者という立場として活動が行われているため、「支援する側-される側の関係」とは違った関係性に身を置くことができる。

実際に学園でのアート活動に参加した職員からは、「『利用者と職員』という凝り固まった関係を変えてくれる気がする」「支援する側・される側、面談する側・される側、といった対面関係が、ワークショップの場では、横になる」といった感想¹²があったり、今回保護者に実施したインタビューでも、「先生も一緒に参加するので、先生との距離が近くなったように感

¹² 社会福祉法人ひかりの園 ワークショップシリーズ「やったことないをやってみる 2019」 報告書 p27

じ、話をしやすくなった。」という回答があった。こうした機会の積み重ねは、活動以外の日々の関係性の変化にもつながっていくもの考える。

続いて、「正解を求めたくなる想い」について、保護者も職員も、子どもとの関わりで日々さまざまなことに迷う中で「正しい関わり方」のような正解を求めてしまうのはごく自然なことといえる。しかし、そうした正解がそもそもあるのか、ということに加え、正解を追求することが「こうあるべき」「こうしなければならない」といった考えにつながり、それがかえって保護者や職員を追い詰めてしまうこともあるのではないだろうか。

しかし、学園でのアート活動では、何か正解のようなものが提示されるわけではない。正解を追求しないといういつもと違った体験を通して、「こうあるべき」をいったん脇に置くことができ、「こんな方法もあるのかも」「これでいいのかも」といった気づきを得ている様子が職員、保護者それぞれに見られている。ともすると子どものことを大切に想い、真摯に向き合おうとするほど、100点満点を目指してしまうといった療育・福祉特有の構造に、アートのゆるやかさ・しなやかさがずっと寄り添い、力みを緩めてくれているように思える。

こうした「支援する側-される側の関係」も、「正解を求めたくなる想い」も、どの療育・福祉の現場でも起こる可能性のあることだと思われるが、これらを療育・福祉の領域の中だけで変えようとするのはとても難しい。さらに療育・福祉の中にいるだけでは、そもそもこれらが起こっていることに気づけないかもしれない。しかしそこに、アートという違った領域の風が吹き込まれると、療育・福祉の世界では当たり前だと思っていたことが浮かびあがり、問い直しが始まる。療育・福祉の中だけの「閉じた」場でなく、開かれた場で考えをめぐらすためにも、福祉×アート活動の場をあえて用意する意味があると考え。

2)参加者それぞれの活動への意味合い

一方で、「学園のアート活動に関するインタビュー」の中で、保護者の方それぞれにとっての学園の活動の意味合いを回答してもらった。以下その内容を紹介する。

・古臭いイメージではない、**新しい、クリエイティブな雰囲気を感じられる場**。「こうでなくてもいいんじゃない?」「他にもこういうのがあるんじゃない?」ということを感じられる。

・コロナで他の保護者の方と話す機会がないが、誰かとしゃべりたい。**横並びの関係でしゃべれる、交流の場**を提供してもらえていると思っている。他の保護者の方のことも知れる。

・子どもは絵を描くのがもともと好きだったが、描いた絵について「これ何?」と聞くようになって、子どももそれに答えたりすることでお絵かきの質が変わったように思う。**お絵かきを通したコミュニケーションが増えた**。

・子どもが遊んでいるとき、「上手にできたね」という声かけくらいだったけれど、おべんとう画用紙をやってから、**子どもの気持ちをより考えてみるようになった**（ブロックで何かを作っている→「何を作っているのかな?」と声をかける）。

・（おべんとう画用紙は）夏休みの、楽しい、難しい宿題。子どもにははじめてご飯づくりのお手伝いをしてもらったけれど、その後もキッチンに来てお手伝いをしてくれるようになり、そんなきっかけになった。任せてみようと思えた。

・いつもと違うことが子どもとできる機会。日常と少し違う、自分では思いつかない活動ができる機会。はじめは少し面倒、という気持ちも正直あるが、やってみてよかったと思える。これまで気づかなかった子どもの一面にも気づける機会。

・子どもは一生懸命想いをもって絵を描き、親はその絵を一生懸命おべんとうを作るという、子どもとの共同作業（子どもが絵を描いてくれたから作れた）

・家でもいろいろと考えながら関わっているが、ついいつもと同じ、固まったものになってしまう。しかし、おべんとう画用紙で作品を再現してみるということは考えたことがなかった（自分では考えつかないことに取り組めた）。この活動により夫など家族で参加でき、子どもへの理解が深まった。新しい視点ももらえた。お子さんが料理に興味をもってくれるようになったので、安全に配慮して一緒にやってみてもいいかなと思っている。（夏の時点では興味はまだなかったけれどいまならやってみようと思える）

・普段は「日々をこなす」というところがあり、他の選択肢もなかなか考えられないけれど、おべんとう画用紙は選択肢の1つとしてインプットされたように思う。子どもも成長しているから、活動したときと変わっている。

・普段子どもに全力投球しているが、消化不良なところもある（何かをやった、という実感が得にくい）。でも作品を作って、「こういうものを作った」と思えて、いい刺激になった。楽しめたし前向きな、元気の源をもらった感じがする。自分でこういう活動を考えてみるのは難しい。はじめはいいやでも、やってみるといい取り組みだと思えた。

この回答を見ると、学園のアート活動がどういった意味を持つ活動なのかについては、それぞれの保護者によってさまざまであることがうかがえる。

- 子どもの成長や気づきを得られる場
- 他の保護者などと交流が図れる、楽しい場
- 日常とは違ったことに取り組み、何かをやったという実感を得られる場

というように参加者ごとに意味合いが異なれば、活動への参加によってもたらされるものも、参加者ごとでさまざまだろう。先ほど、「福祉×アート活動の場」を、「福祉の当たり前」に対する気づきや問い直しが生まれる場、と説明したが、そうした気づきや問い直しが生まれなくてもいいし、そもそも気づきや問い直しを目的とした参加でなくてもいい。それぞれの意味合いで参加し、それぞれが思い思いに、それぞれの人にあった形で自由に表現していいし、しなくてもいい。そうした参加ができる場だからこそ多様な人が集うことができ、多様な人がいるからこそその気づきや問い直しが生まれる。こうした参加の間口の広さやそれぞれの多様な思いを自由に表現できる幅広さは、アートの視点をとり入れたこそこのものといえるだろう。

3)こうした福祉×アート活動の場が今後も維持・波及していくために必要なことは何か？

最後に、今後に向けた提言として、こうした福祉×アート活動の場のもつ良さが維持され、さらに学園外にも波及していくために必要な2つについて説明し、本評価を締めくくりたい。

私たちは日々の生活を送る中で、さまざまな人や物との関係が作られることや、無意識のうちに「こうあるべき」が作られていくことから避けられない。しかし、「こうあるべき」といった縛られもなく、それぞれの意味合いや自分らしさを曲げずに居ることによって、他者への気づきや自分自身への気づきが得られるかもしれない場がある、ということは、障害のあるなしに関わらず、皆がともによりよく暮らす地域社会にもつながると考える。本評価が、そうした地域社会の実現に向けた活動の参考に少しでもなれば幸いである。

提言①：それぞれの気持ちでの参加に対する理解・尊重

図2-6と図2-8で示したように、ポジティブな気持ちで参加した保護者の方が、活動を通して子どもに対する気づきの有無や保護者の気持ち及び子どもとの関わり方や関係性にいい変化がみられる傾向がある、ということが調査において確認できた。

しかし、それは活動中参加者に常にポジティブであることを求めるものではない。先に述べたように、参加者にとっての意味合いはさまざまであり、実施する側が参加者にポジティブな気持ちでの参加を要求することによって、参加者にとっての意味合いが損なわれてしまう可能性もある。加えてインタビューの中で、最初は大変、面倒といった気持ちを感じたが、振り返ってみると参加してよかった、といった感想があったこと等も踏まえると、参加者の気持ちがポジティブかネガティブかということよりも、ポジティブであってもネガティブであっても参加者それぞれが活動の中で感じる気持ちが尊重され、それぞれの気持ちで参加していいと思えている、ということが大切なのではないだろうか。

ただ、実施者側の配慮の不足や活動の場の作り方に起因して、参加者の気持ちがネガティブに傾いてしまうことは、前述のこととは区別して考える必要があり、避けるべきだろう。表2-5でおべんとう画用紙の各段階で気持ちに影響すると思われる要因を整理したが、ここでネガティブな気持ちの増幅につながる可能性があることとして挙げられている、「忙しい中取り組まないといけない」「料理が苦手」「他の子の絵や保護者のおべんとうの方が出来がよかったと感じた」等を例に考えると、「活動の期間を長く設定して余裕があるときに取り組んでもらえるようにする」「子どもが描いた絵や保護者の作ったおべんとうのいいと思ったところを、職員が伝える」といった進め方の工夫をしてもいいかもしれない。もっと言えばおべんとう画用紙の活動の範囲内だけで考えずに、料理以外の活動の機会も用意し、参加者が自身にあった活動を選択できるようにする、という考え方もありうるだろう。参加者それぞれの気持ちの理解・尊重に向けて、具体的にどのようなことが必要なのかについては、今後の活動の中でも引き続き注目、検討していけるといいと思われる。

提言②：参加者それぞれの活動の意味合いに対する理解・尊重

それぞれの参加者にとって学園の活動がどういった意味合いを持つのかは異なる、ということについて、同じ参加者であっても、前回の活動と今回の活動とで意味合いが異なる、という場合もあるだろう。他の保護者との交流を楽しむことを目的

に参加していた方も、あるときの活動でふとわが子への気づきや自身の中にあった思い込みへの気づきを得る、ということなことが起きる可能性もある。

今後各地の福祉現場等でアート活動を取り入れた実践が行われる際、日々それぞれの利用者の方への支援における試行錯誤があるからこそ、実施する側としては活動によって参加者それぞれが目に見える成果を得ることを期待するかもしれない。しかし、福祉×アート活動は、困りごとをたちどころに解決してくれるような特効薬ではない。何か明確な成果を期待しすぎるのが、いろいろな意味合いでの参加ができる間口の広さや参加者それぞれの多様な表現の幅を狭めてしまうことにつながりかねない、ということは十分に理解する必要があると思われる。

一方で活動に参加する人の中にも、活動への参加による変化、といった目に見える成果を期待する気持ちがあるかもしれない。本評価を通して学園の活動を振り返る中で、そうした気持ちや行動の変化を実感している人もいたが、そうした実感できる、目に見えるような成果ではなく、むしろ「目に見える成果を追わなくてもいいのではないか」といった気づきを得た人もいる。こうした意味合いや期待も活動に参加することによって変わっていく可能性はあるが、活動の実施者だけでなく、参加者にも互いの意味合いを尊重しあう姿勢があるといいだろう。

なお、こうした活動を実施する側、参加する側の活動に対する期待に関連して、本調査で行った保護者へのインタビューの中で得た気づきを最後に紹介する。インタビューは2～3名のグループで行ったが、それぞれの保護者がおべんとう画用紙について、参加してから一定の期間が過ぎているにもかかわらず、そのときに感じた気持ちや印象的なできごとについてとても具体的に話している様子が印象的だった。おべんとう画用紙という日常とは少し違った活動だからこそ、普段の生活では見逃されてしまうことにも意識が向けられて気づきにつながり、記憶にも深く残る、といった活動の良さを改めて実感した出来事だった。

さらに、そうした活動が保護者の中で共通の体験としてある、ということの意味も大きいと考える。共通の体験であるからこそ、相手の話により想いを馳せることができ、自身が体験したことと重ね合わせることができる。インタビューの場が、期せずしておべんとう画用紙という共通の体験についてお互いに語り合う場となっていたが、参加者それぞれで活動に対する意味合いは異なっている、こうした語りの場があることによって、それぞれの意味合いの深まりや、意味合いを超えた気づきもたらされる可能性も高まるのではないだろうか。

こうした語りの場は、活動を実施する側にとっても、参加者それぞれの意味合いの理解につながる重要な場であると言えるだろう。参加者それぞれの活動の意味合いを理解・尊重するためにも、参加者同士が活動について語り合う場を設けることもぜひ検討していただきたい。

■ 評価者と本評価の問い合わせ先
フクシノスイッチ 代表 押切重喜
info@fukushi-switch.jp